

報告

青島理工大学と徳島大学との遠距離ビデオ会議 (SKYPE™) 交流の実例分析

——2011年4月から7月までの交流内容を中心に——

鄭 愛軍¹⁾ 大橋 眞²⁾

¹⁾青島理工大学外国語学部 ²⁾徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

要約：日中間の交流の機会が近年増加してきており、これが中国において日本語教育が普及する要因につながってきた。グローバル化社会に適応した人材育成をすることは両国共通の課題であり、そのための新しい教育プログラムの開発が必要になってきている。このような背景をもとに、中国・青島理工大学と徳島大学の間で、インターネットを用いた遠隔ビデオ会議システムを用いて、日本語での双方向性コミュニケーションを実施してきた。これまでに、2009年10月～2010年12月までの交流状況を「実例による異文化コミュニケーションの問題分析-青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に」として本誌に報告した。2011年4月～7月の間も遠隔ビデオ会議の交流を通じて、国際大学間協力と異文化交流に関して大きな成果を収めている。しかしながら、その一方で様々な問題点も浮かび上がってきた。本稿では、実例を取り上げながら、様々なトピックスから異文化交流の課題について検証する。また、両国の学生についての課題についても考察する。

(キーワード：遠隔ビデオ会議、インターネット、日本語学習)

A practical analysis of an issue of intercultural communication using SKYPE™ between Qingdao University of Science and Technology and the University of Tokushima —A case study focused on the communications during April to July, 2011—

Tei AIGUN¹⁾ Makoto OHASHI²⁾

¹⁾Foreign Language School, Qingdao University of Science and Technology,

²⁾Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

(Key words: cross-cultural conversation, internet, studying Japanese)

1. はじめに

グローバル化社会に適応した人材を育成するために、国際人材育成教育プログラム¹⁻²⁾の一環として、2009年から青島理工大学と徳島大学の間で、双方の学生があるテーマに沿って議論するという形式の国際連携型授業として、インターネットコミュニケーションを実施してきた³⁾。2011年も引き続き、週に一回のペースで、青島理工大学外国語学部日本専攻の学生と徳島大学の全学共通教育共創型学習科目の受講生及び社会人が、各5名程度のグループをつくり、事前に相談して決めた話題をめぐってコミュニケーション交流を行ってきた。2011年前期の交流を通じて、日本の東日本大地震とその後の復興に対する課題、持続可能な社会を目指した環境問題、さらにそれぞれの大学生生活など様々な問題を幅広く議論してきた(図1、表1)。その結果として、双方の学生にとってお互

いの社会に関して新しい知識を得るまたとない機会となった。さらに、異なった視点から議論することにより、グローバルな視野を育成することが出来た。しかしながら、今回の交流を通じて、様々な課題もあらたに浮かび上がってきた。本稿は、この半年の交流の経過と共に、今回の交流を通じて気づいた問題点とそれらの問題点の解決に向けての対策をまとめたものであり、今後の交流に役に立てば幸いである。

2. 取組について

2.1. ビデオ会議の方法

毎回学生より出されてきた希望により、テーマを決定して、事前に双方の学生に周知した。ビデオ会議は、スカイプ™を使用して行った。WEBカメラは、ロジクール社 Webcam Pro 9000 QCAM-200SX、ビデオ会議用スピーカはサンワサ

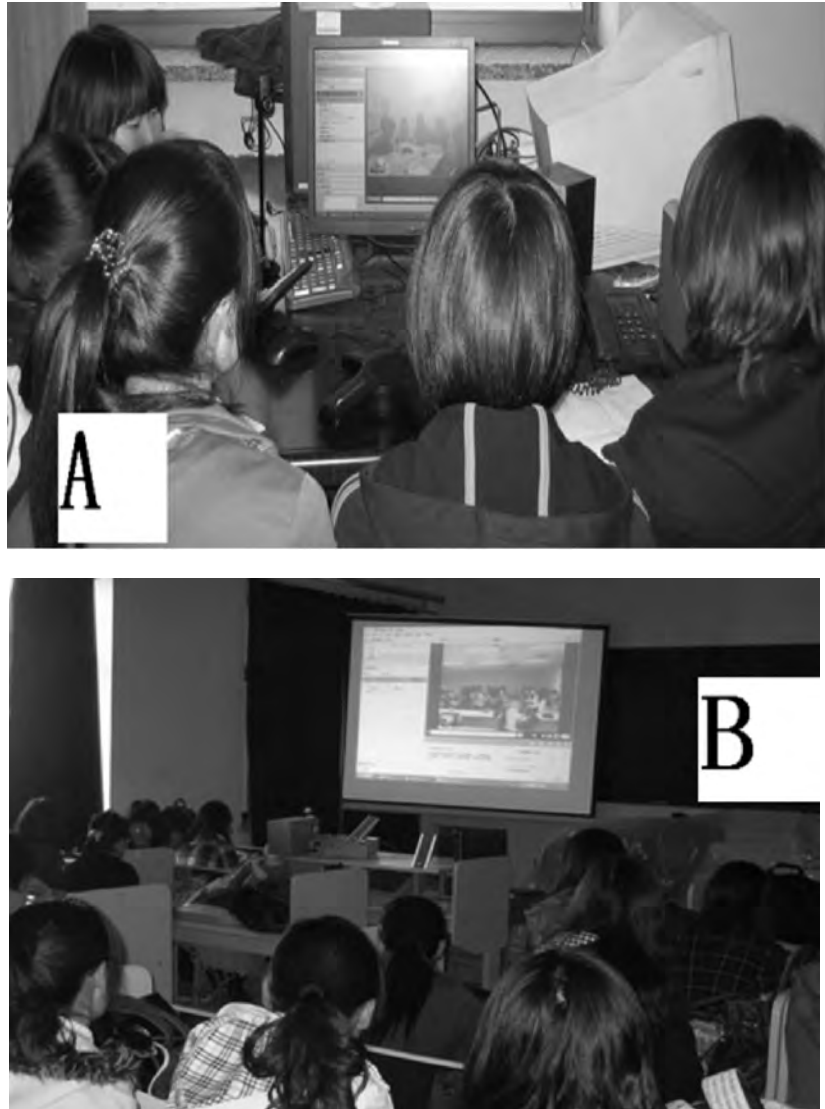


図1 青島理工大学（中国）と徳島大学（日本）との遠隔ビデオ会議風景
A:小人数のビデオ会議 B:スタジオを使ったビデオ会議

プライ社製のものを使用した。

2.2. ビデオ会議の実施

ビデオ会議は、原則として毎週1回実施した。双方の学生は、5～10名程度であるが、社会人が加わることもあった（図1）。また、日本側では、徳島大学の正規の授業時間（全学共通教育社会性形成科目群共創型学習：異文化交流からのFD及び学生FDボランティアスクール——持続可能な社会とは）に実施された。

3. 交流過程における問題点

3.1. テーマ確定段階

このような交流において、議論するテーマの選

定は交流の最初の段階であり、その後の交流を順調に進めるための重要な過程である。今学期の交流においては、表1のようなテーマに決まった。今学期の交流は、青島理工大学の側は2年生が中心であったので、比較的平易な内容のテーマを考えた。今回の交流の結果を見れば、一部の目的は達成できたと思われる。出来る限り多様な文化に触れながら、自らの視点を考え直すきっかけをスカイプ交流において与えることを骨子とした。そのために、話し合いを行う過程において、新しい思考や視点を身につけさせるための工夫をおこなった。しかしながら、テーマを選定したときに考えていた当初の目標に到達出来なかったこともある。このような問題は、話し合うテーマに対する

関心度が双方の間で異なっているときに、特に顕著に見られた。このことから、双方の学生が共に関心を持っているテーマを選定することが重要であると考えられる。例えば、日中双方の社会の今日的な課題をテーマとすることで、双方の学生にとって身近な問題となり、話しやすい環境となる。このように、今後もテーマを選定するとき、双方の社会が共に抱える現代的課題などを取り上げて、両方とも話しやすい環境を作り出す工夫が求められる。

3.2. 報告内容の間違いについて

書く能力は重要である。学生の思考力、知識の把握度、知識の応用力などの能力は、提出された学生のレポートや普段の作文から伺い知ることができる。このような文章における文法や用法の間違いなどから、その学生の日本語レベルを推測することも出来る。例えば、5月9日の交流テーマ「ゴールデンウィークにあたり、日本の高速無料化についてどんな見方があるか」に関して学生から提出されたレポート(表2)を例に挙げる。このよ

うに、文章の中に幾つかの文法的な間違いが見られる。このように時間を経て書かれた文章においてすら、意味不明な表現もあった。この点から見ても、実際の会話における日本語表現にも問題点があることが推察されよう。今後は他の授業においても、日本語による作文演習などの充実をおこなっていきたいと考えている。

3.3. 準備不足と内容不足の現実

今年の東日本大地震に関しては、中国でもすべてのマスコミにおいて、日本の地震後の様子が報道された。それにも関わらず、ビデオ会議での交流では、学生の情報不足や、この件に関する学生の無関心な実情が明らかとなった。例えば、学生のレポートの中には「東日本の地震は震度が高いとしても、南の地方にはあまり影響がないということが分かった」という記述があった。もし地震から500km以上離れた四国地域において、影響がなかったというのは当然であろう。しかし、地震による被害は、直接的な被害だけではなく、原発事後による電力不足、生活必需品の買い占め、放射

表1 2011年前期の青島理工大学(中国)と徳島大学(日本)との遠隔ビデオ会議による交流のテーマ

4/18	大きな地震に直面して、学生として自分がやれることは？	原発事故をどう見るか。
4/25	放射能に汚染された水、魚、食べ物など、日本の食事の自給はこれからどうだろう。	
5/9	ゴールデンウィークにあたり、日本の高速無料化についてどんな見方があるか。	
5/16	国際結婚、特に日中婚姻をどう思うか。	
5/23	大学生の部活に関して、両国はそれぞれ、どんな部活生活を送っているか。	
5/30	6月1日、子供の日、日本の子供の日はどんな感じであろうか。	
6/13	端午節(陰暦の5月5日)に中国ではちまきを食べる由来を紹介する。日本の節句をひとつ紹介してもらおう。	
6/20	日中両国の大学生は期末試験の点数をどう見ているか。重視するのか、大したことではないと見るのか。それはどんな理由があるだろう。	

表2 青島理工大学学生から提出されたレポートの例

1. GWの時、多分の学生は自家に帰ります、旅行しない。
2. 今日日本で高速道路無料化関した政策がありませんが、提案します。
3. 日本では大勢の人は地下鉄を利用した仕事をします、一般的に旅行する時自分の車を乗ります。
4. 日本人は二十歳の時成人式を行います。
5. 日本の大学生は自分の趣味に応じて、専門を選びます。
6. 日本人にとって二十歳までお酒を飲むのはだめです。
7. 彼らはいろいろな観光地を紹介してくれます。
8. 私たちは、今の日本語はまだだです。話したいが、なかなか話せません。

能汚染、企業の活動の停滞などに関連がある分野において、まったく影響がないのかについて、あらかじめよく下調べをしていれば、交流のときにこのような問題点の有無を確認することができたと思われる。また、「無理なボランティアをすると、他人に迷惑をかけるかもしれませんが、今はあまりにしないけど、地震地は落ち着いたらボランティアをすることを認識します。この点について中国とはちょっと違います」という報告もあった。ところが、実際の交流において録音された音声資料には、この点に関してある程度の時間を割いて話し合ったという形跡はない。実際には、地震直後から多くの国の援助部隊が派遣されており、テレビによる報道においても、被災地の現場で活躍するボランティアの姿が映し出されていた。その点からも、今回の会話の中の表現にある「無理なボランティアをする」ということは、どんな場合を指すのかが不明である。また、「中国と違う」ということに関して、実際にどんな点が違うのかについても、明確な説明が必要であろう。実際の会話において、このように予測できない発言が出てきた場合においては、学生の臨機応変に対応できる能力が必要になってくる。このような問題は、普段から問題意識を持って考えていないことに起因すると思われる。

3.4. 会話能力の欠陥

交流時において、まず問題となるのは学生の会話力である。グループ間での交流のときに、全く会話に参加しない学生もいる。その理由に関して、交流後の聞き取り調査では、「よく準備したのですが、いざ対面して会話を始めると、どれをどの様に話せばよいのかわからなかった」というような回答であった。挨拶ができるようになったら、挨拶のあとで、「今日は暑いですね」のような無難な言葉が交わせるようになることが必要であろう。その他の問題として、「話したいことがたくさんあっても、なかなか日本語で表現できない」、「日本語で話したけど、結局自分の本当の意志とは異なった表現になってしまった」というような報告もあった。これは、無口な学生とは別の段階の問題あり、このような交流の機会を通じて会話力のレ

ベルアップを図り解決すべき問題であろう。もちろん普通の授業において、このような問題に対するための対策として、これから個別に対応することにより、全体のレベルアップを図っていく予定である。「習うより慣れろ」という諺のように必ずしもうまくいかず、落ち込むこともあると思われるが、嘶家や芸人も最初は無人の客のステージで話をするところから始めるように、何度も繰返して自主的な練習をおこなうことにより、このような問題は解消できると思われる。

3.5. 避けられない聴解の問題

聴解というものは、母国語者以外の全ての人にとって最も難しいものであると理解されている。日本国際教育支援協会による2008年度日本語能力1級試験のデータ分析における聴解の点数からも、この事実は明らかである(表3)⁴⁾。日本以外に在住する受験者の聴解の平均点が51.6点であり、これは日本国内に在住する受験者の平均点は65.9点より著しく下回っている。この事実は、聴解の能力を向上させる要因として、実際に生活している場での言語環境がもっとも重要であることを示唆しており、海外の受験者は、聴解問題の半分しか回答できないということを示している。

「聴解は難しい」、「どうすればいいかわからない」という学生の声が度々耳に入る。ものを聞くとき、聞く回数、音声の速度、視覚情報の有無などが大事であるが、日々の訓練はなにより大切であろう。毎日NHKやTBSとかのニュースを聞いたり、テレビドラマ、アニメ、映画鑑賞をしたりすることは訓練のための重要な素材である。

交流の時には、十分に下準備をしておいて、常に予測しながら相手のことばを聞くことで、この問題はかなりの部分で解消されると思われる。もし十分に分からないときには、再度説明を求めると、現代の通信手段が持つ対面交流のメリットを利用したほうが良いと思われる。

また、録音をした毎回の交流内容を繰返し聞く方法も解決の糸口になるだろう。

3.6. 質問方法も改善すべき

このような対面会話においては、命題作文と違

って、予想が役に立たない場合が多い。そのために、交流の前にできるだけ万全の準備をする必要がある。

準備が十分ではない場合に起こる事例について、あるビデオ会議において交わされた会話を例に挙げる。

中国側の学生「日本では中華料理が高いと教科書に書いてあるんですが？」

日本側の答え「いいえ」

中国側の学生「ええ…。」

ここで、会話は途切れて、双方が沈黙状態となった。その原因として考えられることは、中国側の学生は、日本側の学生が「高いですね」という答えをするものと予測していたからである。さらに中国側の学生は、その後続く質問として、「どうしてですか？どんな料理が高いですか？日本料理よりどのくらい高いですか？」など、全ての質問は相手が中華料理の値段が高いことを肯定することを想定してつくられていた。そのために、相手の「いいえ」に対して、どうすればいいか戸惑うことになってしまったのである。この対策として、相手側の反応を「ダブル予測」をさせることが必要であろう。すなわち、相手が「Yes」と答えた場合と「No」と答えた場合の両方を想定して次の質問を用意しておくことである。これにより、会話が途切れることの問題点が少なくなり、交流が少しずつ改善していくと期待している。

4. 問題解決案

4.1. 音声資料の利用

2年前から始まったこのスカイプ交流は、現行の設備の範囲内で学習効果を高めるために、毎回5、

6人で一つのグループをつくり交流を行ってきた。この交流における各グループ内のメンバーが、お互いに情報交換することにより、日本との交流の成果として、多くの課題を発見し、様々な問題解決につながっていった。しかしながら、この方式の問題として、あるグループで出た話題に関連して次回交流するときにも、同じような問題に繰り返し遭遇することがあることである。例えば、大生活、日本料理の話などは、その時の交流テーマとは関係なく、たびたび出てくる話題である。このように、別のグループが同じ問題を重複して抱えることを避けるために、普段の授業において、このビデオ会議の録音を学生に聞かせて、理解を深めてもらうことが考えられる。特に、交流時の重要な話題や質問は、繰り返し聞かせることが重要である。また、このような質問や応対の仕方を、出来る限り普段の授業のなかで取り上げて、これらの問題を解決していく必要がある。

4.2. 話題を深く探求させるために

交流の目的の一つとしては、共通の話題について話し合い、その点に関するメリットとデメリットについて、複眼的な視点から物事を見てもらうことを目的としていた。しかしながら、実際にはその効果を十分には実現できなかったこともある。例えば、5月9日に行われた「ゴールデンウィークにあたり、日本の高速無料化についてどんな見方があるか」というテーマでの交流(表1)において、高速道路の無料化のメリットとして、1. 流通コストの低減 2. 地域経済の活性化が計られる 3. 通行料徴収のような経費の節減につながる 4. 無料化を機会として、高速道路関連事業に対する

表3 日本国際教育支援協会による2008年度日本語能力1級試験データ分析

	文字・語彙			聴解		
	国内	海外	総合	国内	海外	総合
受験者数	46911	116234	163145	46912	116212	163124
平均点B	65.8	69.1	68.1	65.9	51.6	55.7
標準偏差	14.8	15.5	15.4	16.3	18.3	18.9
最高点D	100	100	100	100	100	100
最低点E	0	0	0	0	0	0

規制緩和が進めば、例えばSA・PAの利用に関しての自由度も高まり、新規業者の参入がしやすくなるという点、などがある。また無料化によりICの設置の自由度が格段に上がるという意見もあった。その一方で、デメリットとして、交通量が増えることにより、1. 高速道路の痛みが早まり、結果として維持費がかかる 2. 排気ガスにより空気が悪くなる 3. 公共交通機関にも影響が出る 4. 渋滞の問題が頻発するというような点が考えられる。これまで、日本において幅広く討論されてきたような問題に関しては、今回の交流ではあまり触れることが出来なかった。

このテーマで交流することになった当初の目的は、両国共にゴールデンウィークが終わった直後であることから、高速道路の利用状況、道路網の発展状況および無料化の状況などの話を取り上げて、将来の無料化に対する可否について考えさせることであった。しかしながら、実際の会話においては、個人的な旅行の話、大学の部活、食事、大学の専攻、車の利用率などの話が中心になっており、当初に想定された目的から外れる結果となった。今後は、交流のテーマに関して、まず各大学内であらかじめ討論した上で、国際交流の段階に入ることにより、さらに効果的な交流になることが期待される。

4.3. 授業の対応

今回の遠隔ビデオ会議による交流は、日本側においては大学の正規の授業時間（全学共通教育、学生と社会人による授業企画ゼミ、異文化交流から何を学ぶのか、グローバル社会を考える）に実施された。しかし、中国側は、正規の授業ではなく、課外授業として実施された。交流の時間が、この交流を指導する教員の他の授業時間と重なったり、学生が履修しているほかの授業と重なることが、毎年交流において問題となってきた。どうしても時間の調整できない場合には、日本側が時間をずらして対応してきた。この様な不規則な対応は、学生の交流効果、指導効果にもマイナスの影響が出てくる懸念される。そのため、中国側も正規の授業として実施できるように申請している。

4.4. 交流の効果を学生全員に報告

以前に分析した結果に加え、今回の一連の交流を終えて、様々な問題点や新たに気づいた点なども数多く明らかになってきた。また、今回の交流時には、気づかなかった問題点もある。さらには、学生の感想を提出させた後に新たに出てきた課題もある。これらの課題は各グループの間で共有することが重要である。このように、交流の中で浮かび上がってきた問題は、毎回の交流のグループの中だけで終わらせて済むような話ではない。今回のような取り組みの結果は、インターネット、携帯電話及び報告書などのメディアを利用して、全学部の学生に幅広く勉強させる機会とするべきではないかと思われる。

4.5. 実行の国際交流も可能

中国でも豊かな生活をしている学生が増加する傾向にある。従って一部の学生には、日本に留学させたり、日本を目的地とする修学旅行の機会を設けるなどの取組を通じて、視野を広げる機会としたい。また、条件が調べば、日中間の学生が交流する機会を設けることも有効であろう。例えば、中国の学生が日本へ行くことや、日本の学生が中国へ来ることなどを推進して、相互交流を図ることがこのプログラムの発展のために必要であろう。

5. 終わりに

今回の遠距離ビデオ交流の成果として、中国の学生たちの日本語会話レベルが目に見えて高くなったことが挙げられる。また、日本の伝統文化や現代文化に対しても興味を持つ学生数が増加した。さらに、学生の即戦力性、柔軟性、異文化に対する理解力なども著しく向上した。ただし、今回指摘したような問題も存在している。そのために、来学期の交流においては、これらの問題点を少しずつ解決するように改善していきたいと考えている。このような交流が発展して、大学教育の国際化に関して、さらに輝かしい未来が来ることを期待している。

謝辞

このプログラムの実施にあたり、ご協力いただ

いた徳島大学及び青島理工大学関係者の皆様に深く御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 光永雅子・大橋 眞・佐藤高則・齊藤隆仁：グローバル時代に即した環境教育プログラム開発を目的とした体験型異文化交流，大学教育研究ジャーナル，8，91-100，2011
- 2) 大橋 眞・光永雅子・齊藤隆仁：徳島大学「地域社会人を活用した教養教育」の視点からの開発途上国をモデルとした環境教育プログラム開発の可能性，大学教育研究ジャーナル，8，76-81，2011
- 3) 鄭 愛軍・大橋 眞：実例による異文化コミュニケーションの問題分析——青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に，大学教育研究ジャーナル，8，69-75，2011
- 4) 国際交流基金会：海外の日本語教育の現状——日本語教育機関調査，5，凡人社，2008
- 5) 古田暁（監著）・石井敏・岡部朗一・久米昭元：異文化コミュニケーション——新・国際人への条件，有斐閣，1996
- 6) 角田三枝：日本語クラスの異文化理解，くろしお出版，2001